次世代AI「Computer」が知財実務にもたらす変革とガバナンス

Perplexity Computer等の最新AIエージェントは知財実務を劇的に効率化する一方、Enterprise版の利用を前提とした厳格な運用ガバナンスが不可欠です。

知財業務の「手作業」から「ワークフロー」への移行

調査から対比表作成までの自動化

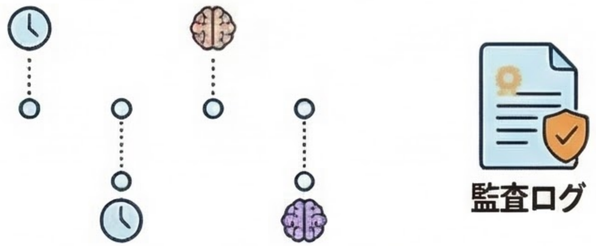
検索、公報の精読、クレーム分解、対比表（クレームチャート）の下書きを一貫して実行。

社内資産からの「発明発掘」支援

実験ログや設計書を構断的に解析し、発明の構成要素を抽出して届出書察を自動生成。

監査ログによる「判断過程」の証拠化

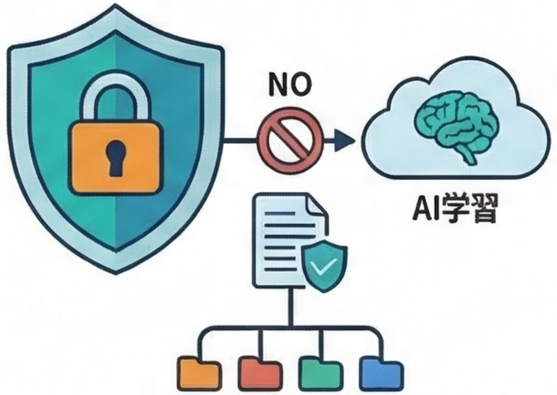
AIの思考ステップを記録し、後日の説明責任や品質監査に対応可能な証跡を保存。



リスクを制御する「知財ガバナンス」の要諦

Enterprise版による「学習不使用」の徹底

営業秘密を守るため、入力データがAIの学習に利用されない環境の選択が必須。



入力データの「４象限」分類管理

機微な発明情報や個人データは原則投入禁止とし、匿名化や要約化による例外管理を行う。

知財実務における主要リスクと対策

リスク区分	具体的対策
営業秘密の漏えい	Enterprise版の学習オフ設定 ＋ データの匿名化投入
発明者性の欠如	AIの寄与と「人間による創作的寄与」の過程をログで記録
著作権の依拠性	RAG出力の引用元URL確認 ＋ 既存著作物との類似性チェック

人間による判断（HITL）の保持

発明者認定や外部提出物の最終確認には、必ず人間の承認ゲートを設ける適用を設計。